

02 おしおきのお浣腸

「つづり様は、とても沢山おしっこを出されたようです」

ベッドの上でおむつカバーを開いた雪華さんが、お嬢様に報告します。

「朝一番の排尿なので、色は濃い黄色です。臭いもキツイですわ」

雪華さんの報告はとても詳しいので、私は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染めてしまいました。

「そう。ところで雪華。つづりが最後に排便したのはいつだったかしら？」

「確か…：昨日は排便なさらず、最後のお通じは一昨日だったかと思えます」

「それは良くないわ」

お嬢様の言葉に、私は身を竦ませました。

おむつに排便できなかった次の日には、お嬢様から特別な罰が下されるのです。

「つづり。あなたのトイレはそのおむつなの。全てその中に出しなさいと言ったでしょう？」

「ご、ごめんなさい…：」

お嬢様の次の言葉を想像して、私は震えてしまいます。

「雪華」

「はい、お嬢様」

「つづりに浣腸をしなさい」

「そ、それだけは…：…！」

やめて欲しいとお嬢様に懇願しようと思いましたが、冷たい目で一瞥されると、私はそれ以上言葉を続けることはできませんでした。

私の顔はきつと真っ青に青ざめていることでしょう。

「かしこまりました、お嬢様」

お嬢様の忠実な僕である雪華さんは、そう応えろとすぐに準備を始めました。

足を高く掲げられた私の恥部は、雪華さんとお嬢様に丸見えです。私がどんなに恥ずかしがっても、隠すことは許されません。さらに、毎晩寝る前に雪華さんが処理をしてくれるので、私のアソコは無毛でツルツルなのです。

まるで赤ちゃんみたいなのをさせられている私のお尻の穴に、お浣腸容器の先端が触れました。

私のお尻の穴には常にお嬢様の精液が入っているので、その入口は常にぬめっています。スポイトのように細いお浣腸容器の先端は、そのぬめりのせいで簡単に私のお尻の中に入って行ってしまいました。

「あ、ああ……くうん……っ」

体内に入ってきたお浣腸液は冷たくて、私は思わず口元を押さえました。それでも、完全には声を抑えることができませんでした。

「あら。せつかく可愛い声で鳴いているのに、手で押さえようとするなんてイケナイ子ね」

いつの間にかベッドの縁に腰掛けていたお嬢様が、私の手首を掴んで言いました。

「雪華。あとでつづりに手枷をつけて、排便が終わるまで縛っておきなさい」

私は自分の失態を悟ったのでした。

新しい布おむつをおむつカバーでしっかりと固定した雪華さんは、先ほどのお嬢様の言いつけどおり、私に手枷をしてしまいました。

赤い革製の手枷は丸いリングで左右が繋がっていて、雪華さんはそのリングに縄を通して、私を天井から吊るすように引っ張ります。

幸いにも、縄は十分な長さがあるので私の足は地面についているのですが、おなかが痛くて前かがみになりそうになると、雪華さんはその縄を引っ張って身体を起こさせます。それなので、身体が辛くて、おなかが苦しくて、脚をまごつかせている私の身体は、必然的にゆらゆらと揺れてしまいます。

「う、うう……苦しい、ですう……」

便意の波が押し寄せてくるたびに訴えるのですが、なかなか排便のお許しが出ません。

「まだちゃんとお菓が効いていないでしょう？ 効き目が中途半端なままで出してしまったら、意味がないわ。もう少し我慢しなさい」

お浣腸は、痛くて辛くて苦しくて……思わず、涙があふれてしまいました。

「あら？ 泣いているの？ でも、ダメよ。許してあげない。これは罰なのだから」「ひぐっ……も、もう許してくださいあい……お願い、ひいっ……」

おなかに溜まった大便が、出口を求めて腸内でぎゅるぎゅると暴れているみたいで辛いです。お尻の穴にぎゅつと力を入れて堪えますが、我慢の限界を超えて身体が震え始めました。

「だ、だめえ……もう、出ちゃううう……!!」

そう叫ぶと同時に、お尻の穴から汚いウンチが飛び出してしまいました。

雪華さんに吊るされている手枷の所為で、ぐしょぐしょになった顔を隠すことも許されず、私はおむつの中に大きなお漏らしをしてしまったのです。

ぷびっ ぷびっ びゆるるるる……!!

水と空気の入り混じった、凄まじい音が部屋に響き渡ります。

「あら、すごい音。だめよ、つづり。こんなに溜め込むのは身体によくはないわよ？」

「い、いやあ……聞かないでええっ……!!」

耳を塞ぐことも、顔を隠すこともできない私は、二人の前でとんでもない醜態を晒していました。涙だけではなく、口からは涎まで垂れてしまっていますが、勿論拭うことはできません。

「言ったでしょう？ これは罰なの。ご主人様の言いつけを守らなかった、ね」

「あ、あああああ……」

しよろしよろしよろしよろ……

排便後の脱力の所為で、膀胱に溜まったおしっこまでもが、おむつの中に流れ出てしまいました。

「うふふ。可愛いわよ、つづり」

お嬢様が満足そうに微笑みました。

お浣腸は、痛くて苦しくて、恥ずかしくて……そして、気持ちがいいので、キライです。



コッ
コッ
コッ
コッ
コッ
コッ

モリッ
コッ
コッ
コッ
コッ

コッ
コッ
コッ
コッ
コッ